

氏名(本籍)	清 ^{しみず} 水 ^{さとし} 論(東京都)
学位の種類	教育学博士
学位記番号	博甲第921号
学位授与年月日	平成3年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
審査研究科	体育科学研究科
学位論文題目	甲子園野球の神話作用に関する研究
主査	筑波大学教授 教育学博士 成田 十次郎
副査	筑波大学教授 教育学博士 山本 恒夫
副査	筑波大学教授 堀 洋道
副査	東京外国語大学教授 山口 昌男

論文の要旨

この研究は、甲子園野球の神話が(1) 歴史的過程において、どのように形成されてきたのか、(2) 現代社会において、マス・メディア特にテレビによって、どのように伝達され、解釈されているのか、(3) 生活共同体のなかで、人々はそれとどうかかわって生きているのかを明らかにしたものである。

序章「研究の動機、目的及び意義」では、我々をひきつける甲子園野球を壮大な文化的パフォーマンスととらえ、それがどのようなシンボリックな意味を我々に伝え、我々がそれをどう解釈し、どうかかわって生きているのかを、広い視野のなかでとらえることによって、甲子園野球が持つ単なる娯楽を越えた意味を明らかにすることの大切さを論じている。

第1章「先行研究の検討」では、スポーツイベントが人間にどのようなシンボリックな意味をもたらし、人間はそれをどう解釈するのか、という点に焦点をあて、シンボルや意味の研究の系譜を検討し、本研究の視点とスポーツイベントにとって重要な未研究の問題を指摘している。

第2章「研究の方法及び分析枠組の提示」では、本研究の(1) 甲子園野球の歴史的な神話形成について、(2) テレビによる神話作用の分析について、(3) 現実の社会における人々の解釈・影響について明らかにする方法と、それぞれの分析枠組を提示している。

本論をなす第3章「甲子園野球の歴史的な神話形成」では、まず校風の発揚の場としての試合、必勝主義と精神修養を基本とした猛練習、これを全校挙げて応援するという「一高精神」と、それに続く安部磯雄を代表とする早慶時代の野球観、即ち必ずしも勝敗にのみこだわらず、スポーツマンの品性や人間性、フェアプレイの精神等を重視する野球観を、甲子園野球はその理念の端緒としていることを明らかにしている。

そして、朝日新聞社が全国中等(高等)学校野球連盟とともに全国大会を開催する中で、「純真

で]、「男らしく」、「すべてに正しく模範的な」「青少年」が「スポーツマンシップ」と「フェアプレイ」の「精神」で「郷土の代表」として、「潑刺たる妙技」を見せるという甲子園野球の神話を、それに反する事実を切り捨てながら歴史的に醸成してきたとしている。

第4章「全国高等学校野球選手権大会のテレビ中継におけるテレビの神話作用分析」では、テレビ中継の映像及び音声の量的分析と視聴者の印象の分析を試みている。

その結果、歴史的に醸成されてきた神話が、現代においてはテレビの映像や音声によって伝達され、視聴者はこれらの内容から「一生懸命さ」、「郷土意識」、「一体感」、「努力」、「理想としてのヒーロー」、「友情」などといった新しい神話作用をうけていることがわかるとしている。

第5章「文化的コンテクストの地平における神話作用の実証」では、徳島県の池田町のフィールドワークの結果について論じている。

ここでは、「さわやかで、のびのびした、高校生らしい池高」(野球)という神話が、池田の自然環境と町民感覚、池田高校気質を基盤として、蔦監督という人物を中核に、メディアの影響もあって醸成されてきたこと、そしてその神話は甲子園出場の度ごとに、自分のアイデンティティ確認の意味も含んで、池田町民の意識の中に再生産され、解釈されてきたことが、まず明らかにされている。

しかし、現実においては、プロ野球を頂点とする、実業団野球、大学野球という日本の野球構造のなかで、池田高校の選手達もまた神話に対抗する問題(野球だけを生活と考えること、非行、処分、過保護等)をひき起こしている事実が指摘されている。

この池田町のフィールドワークの結果を、清水氏は現代社会において甲子園野球の神話が人々の中に生きており、それに対抗する事実とのせめぎあいのなかで、神話を再生産し、解釈しようとしている人間の意識を示すものであるととらえている。

審 査 の 要 旨

オリンピックを頂点とするスポーツイベントは、ビジネス化されつつある現代スポーツを特徴づける社会的現象となってきたが、このスポーツイベントの持つシンボリックな意味や解釈については、これまでほとんど研究されてこなかった。

清水氏がこの未開拓の分野を「神話作用」として研究に着手した意図をまず評価して良いであろう。

この種の研究に際しては、特に方法論が問題とされるのであるが、氏は記号学を基本にすえ、甲子園神話形成の歴史、テレビによる神話伝達の分析、池田町でのフィールドワークというダイナミックな手法を用いている点において優れていると言える。

甲子園野球の神話が、「一高精神」や安部磯雄、飛田穂州らの精神を引き継いだメディア側の支援もあって、神話に反する事実を切り捨てることで醸成されてきたこと、池田町民における神話作用の影響とその解釈が心象のレベルで多面的に明らかにされていることなど評価されよう。

テレビ視聴者に対する神話作用の分析、神話形成の過程におけるアメリカとの比較、夏の甲子園大会の祭祀性など、この研究では十分論議されていない部分もあるが、研究の意義を損うほどのもので

はない。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。